

# 外国人の目に映った藤沢宿

八柳 修之

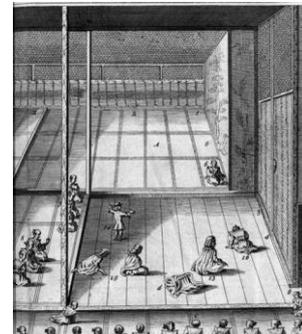
江戸幕府は1633年（寛永10）に始まる鎖国令により、海外渡航禁止、海外在住の日本人の帰国禁止、貿易地の制限、ポルトガル人の海外追放、貿易は長崎でオランダ、中国との貿易のみを行う体制、いわゆる鎖国を行った。この目的は当時全国に広がっていたキリスト教の禁止、宣教師などの入国の防止にあった。なぜ、オランダのみの交易としたか。それは1610年、オランダはスペイン、ポルトガルに日本征服の意図があることを幕府に密告、オランダは布教ではなく貿易を目的とすることのみを約束したからであった。幕府はキリスト教の流入を防止し、貿易と海外情報の収集を幕府自身が管理することであった。

幕府は長崎のオランダ商館長に「オランダ風説書」（オランダ船が毎年、江戸幕府に伝えた海外ニュース）を提出させ、海外の情報を得た。オランダ商館長は年一回、江戸に赴き直接海外事情を報告しなければならなかった。

江戸への紀行文として、ケンペル著「江戸参府旅行日記」、シーボルト著「江戸参府紀行」、いずれも斎藤信訳 東洋文庫がある。その中に藤沢宿に関する記述があるので紹介したい。



江戸参府の模様



綱吉への謁見

## ケンペル



ケンペルはオランダ商館の医師として来日、博物学者でもあり1619年（元禄4年）と1620年（元禄5年）商館長に随行し江戸参府、徳川綱吉にも謁見している。幼少の頃から医学、地誌、語学を身につけ、特に地誌学に造詣が深く帰国後、日本に関する著書も多い。

「四谷（茅ヶ崎注1）の先一里にある藤沢で、われわれは昼食する宿舎に立ち寄ったが、いつもの宿はいっぱいだったので、他の宿に移った。

この小さな町は、半里にも満たない町筋から成っていて、一筋の川（注2）が流れている。

川はここから四分の一里下って、ここまで一日中かたわらに見えていた海に注いでいる。

ここで海は見えなくなり、海岸は街道から遠ざかり、山地となって南東東へ約六里延びて海岸に達している。だから、ここから四里先の程ヶ谷までの間、両側には陸地しか見えないが、それからまた海が現れ、それが別の海岸線となって江戸までの全行程に及んでいた。

藤沢を離れる前に、私はこの村はずれで通り過ぎた寺院（遊行寺）のことを述べなければならない。

この寺でぶらぶらして米を食っている人々の中に、長崎生まれの八十歳になる白髪の高僧がいた。彼は信心深く托鉢の旅に出て、日本国中を遍歴し訪れぬ寺は一つもなく、名僧を装い、一般の人たちから、すでに存命中の高僧のうちに入れられ、聖者の一人として尊敬されるほどの信望を得た。彼は自分の死後、信者が拝むことができるように己の姿を描いて石に刻んだ。同行の日本人は、われわれが食事をしている間にひと走りこの寺に詣でて、この聖者（尊任上人。天和三年以来ここにいて元禄四年九月一五日入寂）に信心深い敬意を捧げた。生存中は誰も神として敬おうとしなかったかの偉大なるアレキサンダーよりも、彼ははるかに成功をおさめたのである」（注3）

（注1）：四谷が茅ヶ崎とあるが、訳者の間違いで藤沢であろう。

（注2）：一筋の川とは境川、（当時は固瀬川といった）

（注3）：尊任上人は時宗遊行 42 代上人。日本国中を遊行し、宮中に参内して大僧正を賜っている。和歌俳諧に長じた。日本国中を遊行したことで、アレキサンダー大王を引き合いに最大限の賛辞を示している。

## シーボルト



元禄時代から下がって文政のころ、日本にやって来たシーボルトがおり、彼の名を知らぬものはいない。シーボルト（1796～1866）は、文政6年（1823）、長崎出島商館付の医師として来日したドイツ人医師である。任務のかたわら鳴滝塾を開き、診療と教育に当たり多くの蘭学者を育てた。文政9年（1826）、商館長とともに江戸参府、徳川家斉にも謁見した。その時の記録が「江戸参府紀行」である。

文政11年（1828）、帰国の際、荷物の中から外国人禁制の伊能忠敬の「日本沿海実測図」が発見され、いわゆるシーボルト事件で、1829年国外追放を受けた。

シーボルトの「江戸参府紀行」斎藤信訳によると、シーボルトは藤沢辺りの光景について、「われわれが渡った川舟はライン河の上流のものと似ている。舟の型にはへりの高いものと低いものがあるが、日本の川の流れの性質によく合っている。農業はこのあたりではとくに発達していないで、わずかの稲田が他の穀物や花の咲くナタネの畑や小さな森と交互に現れてくる。街道はここらでは大変活気があった。これまでより乞食が多かったし、旅行者の慰めに六歳から十二歳ぐらいの少年少女が上品とはいえない越後獅子をしていた。

二人のみすぼらしい荷物人足は襦袢しか着ていなかったし、ほかにただ掛布団に身をくるんだものもいたし、ほとんど丸裸に近いものいた。近くには大名の家臣が馬に乗り、向こうには書状を棒に結び付けて飛脚が走っていた。要するにこうしたすべてのことが大きな首都に近いことを現わしているようだ。

われわれはまだ早い時刻に藤沢に着いたが、一番大きくて上等な宿はすでに満員だったので、運悪く一軒の娼家に泊まらされた。ここでわれわれは、明後日川崎で江戸からくる沢山の友

人の訪問を受けることになっていると聞いた」。

文政9年(1826)、シーボルトが渡った川は平塚と茅ヶ崎の間を流れる馬入川(相模川)である。現在、河口に架かる湘南大橋の全長は約700mある。この街道はここでは大変活気があったと観察しているのは、伊勢参りの人々が渡し待ちをし、その人々を目当てに物売り、乞食、果ては越後から見世物の越後獅子の子供まで集まって来たからであろう。藤沢宿では一番大きくて上等な宿とは本陣(蒔田)である。ここに泊まる事が出来ず、やむなく娼家に泊まらせられたとあるが旅籠のことであろう。当時はまだ旅籠に酌婦を置いてはいけないという規制はなかった。旅籠に飯盛女は二人までと規制したのは、享和3年(1718)になってからのことである。

藤沢には長崎出島を2月15日に出発し、瀬戸内海を船で渡り大坂から東海道を下り、出発してから53日目、4月8日、小田原から藤沢に着いている。54日目、4月9日は藤沢から川崎へ。長崎屋源右衛門の出迎えを受けた。55日目、4月10日、江戸へ。

江戸には5月15日まで滞在し、徳川綱吉にも謁見している。帰途94日目、川崎～藤沢。7月7日、出島を出発し142日目に島に戻っている。

さらに、シーボルトの二度目の江戸参府の帰途の様子を次のように記している。

「藤沢。大きな村で、川には橋があり、路傍には石に刻んだ仏像があった。紀州侯の行列が通り過ぎたのはここであった。一行は80頭以上の引馬、50挺以上の乗り物、鳥の羽の房や馬の毛などの付いた100本以上あるいはそれ以上の槍、30ないし40人の弓持ちの男がいた。将軍家やその他の家の金の紋所の付いた挟箱(ハサミ箱)30個はまだ家の中にあっただが、それは別として、その他の物のことは記さずに置く。この村を通り過ぎると、道は西南西に向かったが、また間もなく西向きとなった」

紀州侯の江戸参府の規模が詳細に描かれている。シーボルトが来日したのはプロイセン政府から日本の内情探索を命じられたとする説もある。開国(1854年)後、1859年再び来日、1861年(文久元)幕府から江戸に招かれ翌年帰国、1866年、70歳で亡くなっている。

(八柳 修之)

参考・引用文献

ケンペル「江戸参府旅行日記」、斎藤信訳 東洋文庫 シーボルト「江戸参府紀行」、斎藤信訳 東洋文庫  
「新し歴史教科書」 扶桑社 「藤沢の文学」 北沢瑞史 藤沢文庫 ウィキペディア